

地域研究コンソーシアム賞

地域研究コンソーシアム (JCAS) は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて(1)共同研究の企画・実施・支援、(2)海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、(3)研究成果の国内外への発信・出版、(4)地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績ならびに社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。

第13回(2023年度)地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第13回(2023年度)地域研究コンソーシアム賞(JCAS賞)の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について下記の通り、審査結果を発表します。

地域研究コンソーシアム賞の研究作品賞は、地域や国境、そして学問領域などの既存の枠を越える研究成果を対象とするもので、作品の完成度を評価基準としています。登竜賞も研究作品賞と同様の趣旨ですが、研究経歴の比較的短い方を対象としていますので、作品の完成度に加えて斬新な指向性や豊かなアイデアを重視して評価しました。研究企画賞は共同研究企画の活動実績、また社会連携賞は、狭義の学術研究の枠を越えた社会との連携活動実績を対象としています。

審査については、運営委員会が担う一次審査によって審査対象作品および活動を絞り込み、専門委員から、一次審査で絞り込んだ作品あるいは活動に対する評価を書面で回答していただきました。今年度の専門委員は、研究作品賞については小川さやか氏、倉沢愛子氏、貞好康志氏、峯陽一氏、登竜賞については梅屋潔氏、岡田泰平氏、宮崎恒二氏、研究企画賞については速水洋子氏、眞城百華氏、帯谷知可氏にそれぞれお願いしました。そして、一次審査の結果および専門委員の評価を踏まえて、地域研究コンソーシアム賞審査委員会(理事会)において最終審査をしました。この場を借りて、審査に関わってくださったみなさま、とりわけ専門委員諸氏に感謝申し上げます。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品4件、登竜賞候補作品13件、研究企画賞候補

活動3件の推薦があり、一次審査によって絞り込まれ専門委員による評価の対象となった作品および活動は、研究作品賞2件、登竜賞3件、研究企画賞1件でした。

多くのすぐれた作品・活動の推挙を感謝申し上げますとともに、受賞された皆様には、委員会を代表して心からお祝いを申し上げます。

以下は、各賞の受賞理由ならびに受賞作品・活動に対する講評です。

研究
作品賞

津田 浩司 著

『日本軍政下ジャワの華僑社会 ——『共栄報』にみる統制と動員』

(風響社、2023年2月)

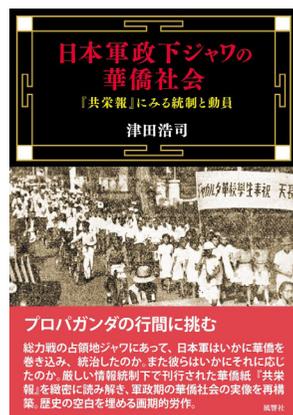
本書は、日本軍政期(1942~45年)のインドネシア(旧蘭領東インド)、とりわけジャワに定住していた約70万人の中国系住民(華僑)に対する軍政府の諸政策と華僑側の対応などの実態を初めて明らかにした労作である。全780頁の大著であるのみならず、分析・記述の質の高さや手法の新規性などにおいて、東南アジア地域研究の最高水準に達していると判断する。

従来この分野の研究は空白に近かった。本書でそれを埋めることを可能にしたのは、日本軍政下で唯一、華僑の手になる華僑向け新聞として発行されていた『共栄報』(華語(中国語)版とマレー語(インドネシア語)版)の原版を、著者自らインドネシア国立図書館で発掘し、利用可能な形にして2019年に復刻出版していたからである。それ自体史料価値の極めて高い『共栄報』全32巻を基礎資料とすることによって本書が成った。

本書の最大の貢献は、インドネシアの華僑研究においても日本軍政研究においても、従来ほとんど知られていなかった華僑に対する諸政策(統制と動員)の推移とその意味、華僑社会側の対応、ひいては軍政期の華僑社会の実態、特に種々の組織・団体・学校の消長を中心とする社会生活の諸相を、初めて詳細に明らかにしたことにある。その際、「華僑」を一括りにするのではなく、両国語で刊行されている『共栄報』の綿密な紙面比較により、未だ移民の歴史が浅く中国の文化・慣習を色濃く残した「トトツ(新家)」と、先祖代々インドネシアに居住しインドネシア化が進んでいる「プラナカン」を明確に区別し、「華僑」の内実に向き合っている。

文献資料の分析手法の綿密さも特筆すべき点として挙げられる。本格的な実証史学的手法が採用され、綿密な史料批判を経て資料が分析される。資料に基づかない推測は最小限に抑制しながらも、資料全体のコンテキストから意味を読み取ったり、官報や日本人・華僑の回顧録など、その他膨大な資料を踏まえたりすることで、総合的に精度の高い情報を積み重ねることに成功している。

さらに、様々な手法が有機的に結合していることも地域研究の成果として際立っている。実証史学的手法に則っていると同時に、著者が文化人類学者として20数年来ジャワで



培った現場感覚や視点も十分に生かされている。索引に現れるだけでも、華僑のみならず他のインドネシア人や日本人を含めて1,000人近い人々による人間ドラマの再構築は、人類学・歴史学・社会学など人文諸学のみごとな融合の賜物といってよい。

本書は、ジャワや華僑以外の地域や集団を対象とする研究者にも多くのヒントを提供している。JCAS作品賞にふさわしい一級の業績であると結論する。

●受賞者プロフィール

津田 浩司 (つだ こうじ)



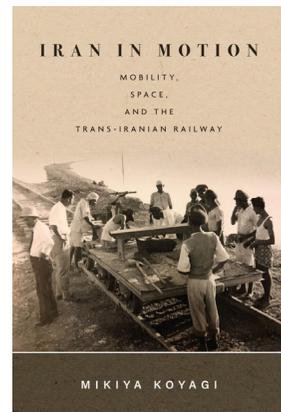
東京大学大学院総合文化研究科教授。専門は文化人類学、東南アジア地域研究。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)。日本学術振興会PD(名古屋工業大学)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教、東京大学大学院総合文化研究科准教授を経て現職。インドネシアの華人社会を対象に、マクロな社会・政治環境の変化の只中で人々の暮らしの場で生起する「民族」、「宗教」、「伝統」等とされるものの動態をミクロに明らかにする研究を続けている。著書に『「華人性」の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』(世界思想社、2011年)、『日本軍政下ジャワの華僑社会——『共栄報』にみる統制と動員』(風響社、2023年)、共編著に『「華人」という描線——行為実践の場からの人類学のアプローチ』(櫻田涼子・伏木香織との共編、風響社、2016年)、『「国家英雄」が映すインドネシア』(山口裕子、金子正徳との共編、木犀社、2017年)等がある。

登壇賞

Mikiya Koyagi (小八木 幹也 著).
***Iran in Motion: Mobility, Space,
and the Trans-Iranian Railway,***
(Stanford: Stanford University Press,
April 2021)

意識の形成を、労働者や観光客、巡礼者や政治活動家など多様なアクターの複数の視点を交錯させながら描いた力作であり、また読み物としても魅力的な内容となっている。

分析に使われたのは、公文書や新聞、業界誌、旅行記、回想録など多様かつ膨大な資料と、イランだけでなくイギリスやアメリカ、デンマークなど広汎な地域の資料である。19世紀の世界的な交通革命の時代に構想されたイラン横断鉄道プロジェクトは、当初は、ヨーロッパとアジアをつなぐ文明を超えたプロジェクトとして構想されていた。しかし、19~20世紀にかけて、テヘランを中心とする国家を単位とする空間を創造するために定義されるプロセスを経て、第二次大戦後も国家としての空間が意図されていた。その後は、国家の意図を超えて、多様なアクターによる多様なmobilityの実践が新たな空間を創出することになった。すなわち、イラン横断鉄道は国家空間の創出だけでなく、実際には、鉄道の多様な利用者が地域、国家、国家を超えた空間を自在に往来す



ることで、それぞれの空間をつなぐ新たな空間を生み出し続けた。

本書の特筆すべき点は、先述したように、多岐にわたる資料を用いて綿密な分析がなされていることにある。それに加えて本書では、個々の経験に基づくミクロの視点と、国家を超えたマクロの視点が織り交ぜられながら論が展開することもまた、空間創出のプロセスを描写するための重要な工夫となっている。イラン横断鉄道を軸にして、地域の視点がより広域の地域の動態の中で影響を受け、その結果、どのような新たな空間が創出されているのかという視点は、地域研究の観点から大変興味深い。

最後に、地域研究の書を英文でまとめ、それが読まれるようにすることの著者の努力も高く評価したい。

●受賞者プロフィール

小八木 幹也 (こやぎ みきや)



テキサス大学オースティン校中東学部、アシスタント・プロフェッサー。2023年秋学期スウェーデン高等研究所バープロ・クライン・フェロー。一橋大学社会学部卒、テキサス大学オースティン校中東学部修士、歴史学部博士。ニューヨーク大学中東イスラム学部アシスタント・プロフェッサーを経て2018年9月より現職。主にイントラ・アジアな物的、人的、知的ネットワークという観点から近現代イラン史、特にボーダーランド史、そして日本と中東の交流史を研究している。

登竜賞

寺内 大左 著

『開発の森を生きる ——インドネシア・カリマンタン 焼畑民の民族誌』

(新泉社、2023年2月)

本書は、長期にわたる現地調査と圧倒的な量のデータに基づいた、熱帯の焼畑民に関する分厚い民族誌である。カリマンタンのダヤックの人々が、開発以前からすでに多角的な生計活動を営んできたことを具体的なデータを用いて指摘し、自然資源利用、慣習的な制度、相互扶助慣行などが、国家や企業が主導するアブラヤシ農園開発と石炭開発を契機にして柔軟に展開してきた様態を描く。焼畑民は、従来言われていたように、自らの生活を脅かすリスクを低減するために開発を拒否したりそれに抵抗したりするばかりではない。自らの土地が産する物品が商品価値をもったり、またその価格が騰貴したりするなど、プラスの不確実性を活かすべく、アブラヤシを焼畑の体系に組み入れ、開発を選択的に受け入れたり借用したりしてきた。開発を拒否する場合でも、具体的な生活リスクを避けるためばかりでなく、自律性を重視した決定を行っているなど、従



来はあまり議論されることのなかった重要な知見をすくい上げている。さらに、先住民の権利の尊重が新たな利益相反や集団化など、これまでの不文律との齟齬を生み出している状況を明らかにし、開発に賛成か反対かという単純な二者択一では捉えきれない、現場の人たちの論理を明らかにしようとしている。また、そうした現地の人々の声を、アブラヤシや石炭の消費者側にも届けようとする著者の姿勢も評価できる。

本書の特徴は、何よりも現地で取得したデータに基づき、現地の焼畑民の論理に寄り添って議論が展開している点であろう。また、現地の自律的な決定と、熱帯林保全や開発といったグローバルな課題との間を架橋する著者の視野の広さも重要な特徴となっている。地域社会をグローバル世界とつなぐ重要な視点が研究成果に活かされている点は、地域研究の作品として高く評価できると同時に、東南アジアだけでなくアフリカも含め、開発の波にさらされる熱帯林の焼畑民研究における重要な研究成果であると評価できる。

●受賞者プロフィール

寺内 大左 (てらうち だいすけ)



筑波大学人文社会系・准教授。専門は環境社会学、環境人類学、国際開発農学。博士(農学)。東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学。インドネシアのカリマンタンおよびスマトラ島でフィールドワークを行う。自然資源に依存しながら暮らす地域住民が、国際社会・国家・企業による森林の開発・保護をどのように認識し、どのように対応しているのかを調べている。そして、外部者が想定する「正しさ」を地域住民の視点から問い直し、多様な開発・保護のあり方を検討する研究を行っている。主な論文に「グローバル・コモディティの環境社会学」(『環境社会学研究』27、2021年)、「東カリマンタンの石炭開発フロンティアにおける焼畑社会の再編」(『東南アジア研究』58(1)、2020年)、「焼畑民によるアブラヤシ農園開発の受容」(『東南アジア研究』55(2)、2018年)などがある。

研究
企画賞

宮脇 幸生
「女性器切除：
グローバルな廃絶運動と
ローカル社会の多様性」に
関する国際的・学際的研究会

女性器切除 (FGM/C: Female Genital Mutilation/ Cutting) は、SDG s において廃絶が明文化され、現地事情を顧みない普遍主義・道徳主義的な反対論が近年、更に根絶の主張へと強化されてきた。同時に、一方的な根絶の動きが、逆に、各地で反発や危険なヤミ実践などの問題を生じさせている。

本研究企画は、FGM/Cについてアフリカの複数の国家の事例を取り上げ、さらにアジア (マレーシア) の事例を包含することで地域的多様性についても検討すると同時に、文化人



類学、政治学、医学、ジェンダー論など、多様なディシプリンを持つ研究者が日本、アフリカ、アジア、オーストラリアから参加する、学際的かつ国際的な広がりを持つ研究課題として企画された。そこでは、各々の研究者が自らの調査地におけるFGM/C実践をめぐる綿密な実態分析を進める一方、FGM/C廃絶をめぐって各地で生じた混乱や軋轢について、国際的に推進される廃絶運動や言説も含めて検討してきた。従来議論されてきた各地域の宗教や文化とFGM/Cの関係に加え、廃絶を求める国際的潮流を受けた各国の法制度整備の弊害や、地域社会内でもFGM/Cに関して世代や階層、ジェンダーにより多様な認識が生まれている点も実証的に示されている。1980年代以降、FGM/Cをめぐって「価値普遍主義か文化相対主義か」といった二者択一的な議論を乗り越えることが困難であったが、本研究は、上記の議論や国際的廃絶運動に一石を投じる研究成果を示したといえる。

こうした堅実かつ重要な研究成果を生み出すために本研究企画では、2017年から6年の年月をかけて特にアフリカを中心に現地を知悉する多分野多国籍の研究者らが、研究会・学会発表・原稿読み合わせ等を通じて真摯に議論と発信を続け、それに基づいて和書(宮脇幸生・戸田真紀子・中村香子・宮地歌織(編著)2021.『グローバル・ディスコースと女性の身体——アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』晃洋書房)と英文書籍(Kyoko Nakamura, Kaori Miyachi, Yukio Miyawaki, Makiko Toda(Ed.) 2023. *Female Genital Mutilation/Cutting Global Zero Tolerance Policy and Diverse Responses from African and Asian Local Communities*, Springer.)を刊行してきた。それ以外にも、研究成果が日本語、英語による学術書の出版ならびに国際学会、国内の学会、研究会等を通じて広く公表されている。研究内容の学際性や実証性と共に、JCASの研究企画賞に極めてふさわしい企画であると判断される。

●受賞者プロフィール

宮脇 幸生 (みやわき ゆきお)



大阪公立大学現代システム科学研究科教授。専門は文化人類学、地域研究。京都大学文学部卒、京都大学文学研究科修士課程修了。博士(京都大学 人間・環境学)。大阪府立大学助手・助教授・教授を経て現職。日本学術振興会専門研究員(文化人類学 2020 - 2023年)。主たる研究テーマは、エチオピア西南部農牧民社会における生態資源利用と歴史認識。著書に『辺境の想像力——エチオピア国家に抗する少数民族ホール』世界思想社 2006年、共編著に『講座 世界の先住民民族 ファースト・ピープルの現在 05 サハラ以南アフリカ』明石書店 2008年、『国家支配と民衆の力——エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会』大阪公立大学共同出版会 2018年など。

2023年11月18日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会